

お便り

POST

II

◇読者から◇

当誌のキーワードは「確かさ」ではないかと思いました。

前面には出さないにしても、子ども理解、子どもと政治制度、子どもと社会、子どもと歴史、子どもと文化、子どもと世界等々、子どもを軸に季刊ごとに確かな「つっこみ」が提供されるとありがたいと思います。これまで当誌が得意だった子どもの理解などのほかに、情報そのものに留まらず、その裏にある現実の問題が時空間の中で明らかになると、保育と社会の事実又は様相が、重層的に浮き彫りになるのではないのでしょうか。

(茨城の愛読者より)

ネット配信記事

「パパ予備軍に捧ぐ育児講座」

http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA02800_01

比較的若くして（26歳、28歳）結婚し、その後それぞれ11年、7年、と年月を経てからわが子を授かった男性医師二人の対談記事。

「本講座では、『仕事も育児もできる』ふたりが育児参加の効用や時間づくりの工夫、医師の『ワーク・ライフ・バランス』の問題までを語り尽くす。男の子育ては、思いのほかワクワクする楽しいことなのかも……。」（医学書院／週間医学界新聞 2008年10月6日号掲載記事冒頭より）

日本保育学会第67回大会のお知らせ
「ヒトから人へ、人からヒトへ」

会期：2014年5月17日（土）、18日（日）

開催地：大阪総合保育大学、大阪城南女子短期大学

子どもを取り巻く環境・子育ての環境が大きく変容した今、保育の制度もまた大きく変わろうとしています。

第67回では、発達と同時に子どもをめぐるつながりをあらゆる言葉として「ヒトから人へ、人からヒトへ」を掲げ、子どもは人間であることを軸に、大人と子ども、また地域・社会への適応といった、人との関わり方を皆様と考えあう場としたいと思います。（第67回大会HPより）

<http://www.hoiku-67taikai.info/>

本の紹介

『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』 平田オリザ 講談社現代新書 2012年

原因と結果を一直線に結びつけない考え方を一般に「複雑系」と呼び、コミュニケーションの問題を「複雑系」で考えるのが筆者の言う「コミュニケーションデザイン」という視点、新しい学問領域である。例えば、これからの時代に必要ならもう一つの（人々を力強く引っ張っていく能力とは別の）リーダーシップについて「弱者のコンテクストを理解する能力」であるとして、次のように言う。「社会的弱者と言語的弱者は、ほぼ等しい。私は、自分が担当する学生たちには、論理的に喋る能力を身につけるよりも、論理的に喋れない立場の人びとの気持ちをつみ取れる人間になってもらいたいと願っている。」同感であるし、自分自身そういう者であれたらと思う。（KT）